



(注)延べ人数、全国32支部が回答。  
日本対がん協会の調査より

今年上半期(1~6月) 本対がん協会(東京都中央に胃や大腸などのがん検診区)の調査で分かりました。20年同期比では2倍超を受けた人は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う受診控えが続いているとみられ、以前の水準には戻って

## がん検診、約17%減

コロナ感染拡大前の19年比

いない実態が明らかになりました。

協会は7~8月、市町村

のがん検診を受託する全国42支部に受診者数などを質問。32支部から回答を得ました。

今年上半期に胃、肺、大腸、乳、子宮頸(けい)のがん検診を受けた人は延べ156万6022人。最初の緊急事態宣言が発令された期間を含む20年上半期(70万4385人)の約2.2倍に増えましたが、感染拡大

前の19年上半期(189万5708人)と比べ約17.4%も減りました。

同協会の小西宏プロジェ

各検診の減少幅を今年と19年で比べると、胃がんが最も大きい約21%で、肺が約20%、乳がんの約17%が続きました。同協会が全国で1万2千人増え

は、検診数の伸び悩みについて、市民の受診控えが続いていると分析。また、3密回避のため人数制限を設けた会場があるほか、自治体がワクチン接種の準備に追われ、がん検診にま

掛かっています。